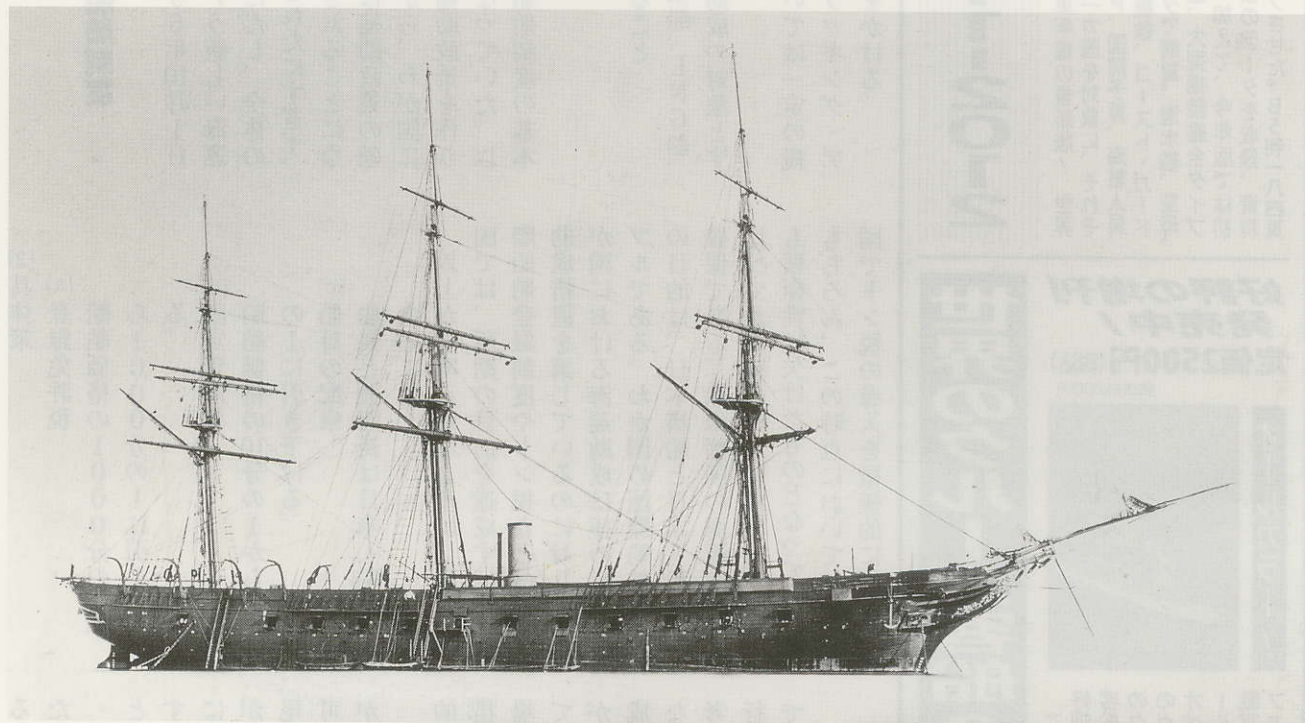


オランダで 建造された 幕府海軍の 最優秀艦



開陽丸建造地（写真の左側、筆者撮影）



開陽丸（船の科学館提供）

開陽丸

《 主 要 目 》 フリゲート艦、木造、シップ型帆装、排水量2,590トン、垂線間長68.60メートル、型幅13.04メートル、主機横置トランクピストン型1基（スクリュウ推進）、出力400公称馬力、速力10ノット。備砲（完成時）16cm前装施条砲18門（クルップ社製）、30ポンド前装滑腔砲8門ほか（データは元網数道氏「幕末の蒸気船物語」による）。慶應2年（1866）オランダ、ヒップス・エン・ソーネン造船所（ドルトレヒト）で竣工。明治元年（1868）北海道江差で座礁沈没

建造地ドルトレヒトを訪れる

オランダ南部のドルトレヒトは、メルウェーデ川（ライン川・マース川水系）に沿った小さな港町である。特に名所や名産品があるわけではないが、筆者は以前からこの地に関心を持ち、いちど訪れたいと思っていた。幕府海軍の最大かつ最強の軍艦「開陽丸」が、ここで建造されたからである。

昨春秋、多年の念願がかない、この地を訪れることができた。アムステルダム中央駅から急行で約1時間半。ロッテルダムを過ぎ、大川の鉄橋を渡ると、左側の車窓にこの町の象徴である聖母教会の高塔が見えてきた。かつて、日本人留学生の赤松大三郎（則良）、榎本釜次郎（武揚）らが仰ぎ見た塔である。

水路が多い美しい港町だった。昔の街並みが残っており、ネットで入手した140年前の地図が使えた。ひとり旅だったので、筆者は気ままに歩きまわった。月代（さかやき）をのびした赤松らが、街角から不意に現われるのではないか。そんな妄想に陥りそうな古い町だった。

「開陽丸」を造ったヒップス・エン・ゾーネ造船所がとくに仕事をやめ、工場がないことは知っていた。筆者としては、同艦が造られたゆかりの地のたたずまいに触れたかったのである。その故地は、メルウェーデ川に面した今のウィルヘンボス通りにあった。鉄

道の鉄橋のたもとのあたりである。

そこから歩いて30分ほどの所に、18世紀の調度品を所蔵するシモン・ファン・ハイン博物館がある。この館には「開陽丸」コーナーがあり、ゆかりの品々や建造中の写真が展示されていた。ちなみに、図面など同艦の関係資料は、ロッテルダムとアムステルダムの海事博物館などに散在している。

短命に終わった悲運の軍艦

「開陽丸」は、幕府がオランダに発注して建造した木造蒸気軍艦である。

建造時のオランダの海軍大臣は、長崎海軍伝習所の第2次オランダ教師団長カッテンディーケであり、建造を全面的に支援した。同じころオランダに派遣された日本人留学生のうち、赤松らが建造に立ち会った。

命名式にはカッテンディーケ、設計者ファン・オールト、赤松、内田恒次郎、沢太郎左衛門らが出席した。艦名は「開陽丸」で、留学生らが「フオールリヒター」（夜明け前）の意味であることを披露すると、出席者たちはその美しい名前に感動の声をあげた。

慶應2年8月（1866年9月）、建造契約を仲介したオランダ貿易会社に引渡され、フリッシンゲンを出航した。回航責任者はディノ海軍大尉で、オランダ人士官のほか、榎本、内田、沢らも乗り組んだ。

喜望峰経由で回航。石炭補給のためリオデジャネイロと東インドのアンボンに寄港。慶應3年3月、横浜に到着。同年5月、幕府に引渡された。

「開陽丸」は不運だった。幕府海軍の旗艦となり、最大最強の戦闘力が期待されたにもかかわらず、幕府はまもなく崩壊した。

鳥羽・伏見の戦いとき、大坂湾に出動し、薩摩藩の軍艦「春日丸」と徳島沖で砲撃戦を演じたのが、生涯で唯一の海戦となった（阿波沖海戦）。「開陽丸」のクルップ砲、「春日丸」の阿姆斯特朗砲の対決であったが、双方とも損害はほとんどなかった。

このとき、艦長として同艦の指揮をとっていたのは榎本、副長は沢である。鳥羽・伏見の戦いのあと、「開陽丸」は大坂城を脱出した將軍徳川慶喜を乗せ、品川沖まで航海した。

幕府崩壊後、「開陽丸」は榎本ひきいる旧幕府艦隊の旗艦となり、僚艦とともに北上。箱館を拠点に明治新政府に対抗した。

明治元年11月（1868年12月）、「開陽丸」は陸上軍支援のため、榎本自ら乗り込んで江差沖に出撃。同地を占領したが、艦は強風により座礁し沈没。わずか2年3カ月の短い生涯を終えた。あつけない最期だった。

終焉の地となった江差には、現在、復元船が建造され、引き揚げられた遺品が展示中である（開陽丸青少年センター）。

山田迪生